

# 「説」の原型としての伊尹故事

谷口 匡

## 一、はじめに

「説」ジャンルの散文は、唐代以後になつてしだいに形を成してきたもので、それ以前はほとんど残っていない。しかし時代を遡れば、後世に見られるような単独の散文作品とは別の形で「説」は存在した。

そもそも文人が単独の作品によつて名声を博するのは秦漢以後で、先秦にはそうした状況はなかつた。褚斌傑『中国古代文体概論（増訂本）』には次のように述べられている。

先秦のころは、文学と歴史と哲学とは分離していなかった。そのうえ、当時の学者たちは、それぞれ一家の言を有していて、歴史散文は一冊のまとまつた著作だったし、また諸子百家の学術的著作も、ある思想家あるいはその学派の論じたものを、まとめて一書としたものであつて、単独の文学作品が出現することは、ほ

とんどありえなかつた。<sup>(1)</sup>

このような中で、「説」の濫觴はいかなる形で現れるのであろうか。

「説」をジャンルとして意識した発言として最も早いのは、西晋・陸機の「文賦」である。そこには「説は光り輝いて偽り欺く」（説燁曄而譎誑）とある。すなわち相手を喜ばせながら説得するという「説」の特質が、ここにすでに示唆されている。ただ「文賦」での言及はそれだけにとどまり、まだ「説」の具体的な事例は述べられていない。

「説」についてはじめて理論的にまとまつた論述がなされたのが南朝梁・劉勰の『文心雕竜』論説篇であり、伊尹の「説」についても次のように取り上げられている。

「説」は、悦（喜ばせる）である。（旁の）兌は（易の）八卦の一つとして、口舌を意味し、よつて言葉で人を喜ばせる。……「説」の優れたものをあげると、伊尹

は味覚を論じて殷を盛んにし、呂尚は釣りの話を述べて周を強大にした。<sup>(2)</sup>

ここにはまずその字形から「説」の原義を言い、そのあとで伊尹と呂尚の事例があげられている。この原義と事例とは無関係ではない。言葉で人を喜ばせるのが「説」なら、そのすぐれた事例としての伊尹と呂尚の「説」も、それぞれまず味覚や釣りなどの話をして主君を喜ばせたあとに本論に移り、殷や周の政治に貢献していったと思われるからである。ここに相手を説得する弁論としての「説」の一つの原型が見られる。つまり、相手をより卑近な分野で話に引き込んで喜ばせ、その上で本題に入るものである。

本稿では「説」の原型としての伊尹故事に着目し、その特質と展開を論じる。

## 二、伊尹故事と「説」

上記の伊尹の「説」のもとになっている故事は、たとえば、君主を説得することの困難さについて述べた『韓非子』説難篇に次のように見えている。

伊尹が料理番となり、百里奚が捕虜となつたのは、いずれもそれによって君主に知遇を求めたのである。<sup>(3)</sup>

また同じく「難言篇」では、これをさらに詳しく述べて、

上古の時代、湯王は至高の聖人であり、伊尹は至高の知者であった。そもそも至高の知者が至高の聖人に説いたのに、七十回説いても受け入れられず、みずから鼎とまな板を持つて料理人となり、そのそば近くに親しく仕えて、湯王はそこでやっとその賢明さを知つて登用した。よつて至高の知者が至高の聖人に説いても必ずしも至高だから受け入れられるとは限らないとされるのは、伊尹が湯王に説いた場合がそうである。<sup>(4)</sup>

という。ただこれらでは伊尹が湯王に近づくために料理人となつた事実のみが書かれ、その「説」には触れていない。一方、『孟子』万章上篇では、孟子は弟子の万章の質問に答えて、こうした事実は実際にはなかつたと否定している。

万章が「伊尹は料理によつて湯王に知遇を求めた」という人がいますが、事実でしょうか」と問うた。孟子は言った、「それはちがう。伊尹は有莘の野で耕作に従事し、堯舜の道を楽しんでいた。……湯王が使者に贈り物を持たせて招聘すると、伊尹は気にもとめぬようすで『私はどうして湯王の招聘の贈り物を受け取つたりしよう。田んぼの中にいて、堯舜の道を楽しむ方がい』』と言つた。湯王が三たび招聘に行かせたと

ころ、やがて伊尹は考えを改めて言った、『田んぼの中にいて、堯舜の道を楽しむより、今の君主を堯舜に匹敵する君主にする方がいい。……』<sup>(5)</sup>

これは伊尹から知遇を求めようとしたのではなく、逆に湯王の方が礼を尽くして伊尹を招き寄せたとするのである。『史記』殷本紀ではこれらを受けて、湯王と伊尹の出会いが次のように記されている。

伊尹は名を阿衡といった。阿衡は湯王に知遇を求めようとしたが、つてがなかった。そこで有莘氏つきの召使いとなって、鼎とまな板を背負い、調理の味加減を湯王に説き、王道を実行させた。一説に、伊尹は隠士で、湯王は使者を派遣して迎えにいかせ、使者が五回往復してはじめて湯王に仕えることを承諾し、上古の帝王や九人の君主の所業について述べた。湯王は彼を登用して國政を任せた。<sup>(6)</sup>

ここには伊尹の出仕について二つの故事が併記される。一つは自ら出仕を求め、まず湯王の後である有莘氏の召使いとして宮中に入ったというもの。また一つは逆に湯王の方から伊尹を招聘し、何度も礼を尽くしてやつと朝廷に出仕させたというものである。これはあるいは『韓非子』や『孟子』を受けて、どちらとも決めかねたためであろうか。

いずれにしても当時、両説が伝えられていたのである。ところで、『史記』では単に調理人となった、また湯王が呼び寄せたというだけではなく、注目すべき発展が見られる。すなわち傍点部分で、前者では味を論じたということ、後者では帝王や君主について述べたということ、つまり伊尹が湯王に述べた言葉の内容が付け加えられている。

「説」の観点からいえば、伊尹が実際に湯王に説く段になつて、前者はまず調理論から始めて政治論に移っているのに対し、後者は最初から政治を論じている点が重要である。後者では最初から伊尹の実力は認められているから、湯王は伊尹の言うことに耳を傾けるだけである。そこには君主を説得する「説」が入り込む余地はない。前者では伊尹が湯王に認められようと調理人となつて近づいていったが、つて最初に味覚の話で湯王をひきつけ、納得させた上で、本来の目的である政治の話へと移っていく必要が生じる。ここに臣下が君主を説得する「説」の原型が存する。<sup>(7)</sup> さきに『文心雕龍』や『韓非子』が取り上げていたのは前者の場合である。本稿ではそのような調理論から政治論に移る場合をさして伊尹の「説」と呼ぶことにする。

### 三、伊尹の「説」の系譜

こうした伊尹の「説」と同様の系譜にあるもの、すなわちある種の特別な技術をもとに君王に知遇を求める系統の話を、次に『史記』からいくつか取り上げてみたい。

まずは『文心雕龍』で言及していた、「齊太公世家」の呂尚の「説」がある。すなわち太公（太公望）こと呂尚が釣りの話で周の西伯（文王）に認められる故事である。

思うに呂尚はそれまで困窮した生活を送って、年老いてしまい、釣りの機会を利用して周の西伯に知遇を求めたのであろう。……周の西伯が狩猟に出かけると、はたして渭水の北で太公に出会い、話をして大いに喜んだ。……太公を車に乗せていっしょに帰り、軍の指揮官に任命した。

「話をして大いに喜んだ」のは、釣りの話から政治論に及んだのであろう。「滑稽列伝」では「太公は七十二歳まで仁義を実践して、文王に出会い、その説を実現することができ、齊国に封ぜられた」（太行躬行仁義七十二年、逢文王、得行其説、封於齊）とあるから、その場合の「説」は政治に関する主張を含むものであった。

『韓非子』説難篇で君王に知遇を求めて捕虜となったと

書かれた百里奚は、『史記』秦本紀に登場する。「秦本紀」

では秦の穆公の五年に晋の献公が虜と號を滅ぼした時、虜の大夫百里奚も捕虜にしたとあるだけで、百里奚がすすんで捕虜になった事実は見えない。晋が百里奚を秦の穆公夫人の召使いにすると、彼は秦を逃げ出し、途中で楚の野人につかまり、雄ヒツジの毛皮五枚で秦に買い戻された。そこで穆公は捕虜から解放してやり、百里奚は国事を三日間語って穆公を満足させ、国政を任せられるに至る。

ただその時の百里奚の回顧談に、「周の王子穰が牛を好んだので、自分も牛飼いの技術によつて面会を求めた」（周王子穰好牛、臣以養牛干之）とあり、「商君列伝」にはやや詳しくその事情が見える。

また、春秋時代の曹では公孫彊が狩猟の「説」によつて君主の伯陽を喜ばせたと「管蔡世家」にある。

伯陽は即位すると狩猟を好んだ。即位後の六年、曹の田舎者の公孫彊もまた狩猟を好み、白い雁を射止めて伯陽に献じ、さらに狩猟の説を語ると、そこで伯陽は政治について尋ねた。伯陽は彼の話に満足して、信任し、司城に任命して政務を処理させた。

公孫彊はただ白い雁を贈つて伯陽に取り入ろうとしたのではなく、狩猟に関する道理を語つて気に入られ、やがて

政治論に及んだ。

下つて戦国時代、琴の名手であつた斉の騶忌(騶忌子)は威王と会見し、音楽の理論を用いて政治の道を説いた。そのことは「田敬仲完世家」に見える。

騶忌子は琴の腕前で威王を喜ばせ、宮中に住む。ある時、威王は騶忌子から琴の演奏を褒められると不機嫌になり、劍に手をかけて褒めた根拠を問う。騶忌子は琴の音色や弾き方から説明するが、王は「音楽を語るのほうまい」と言うだけで納得しない。騶忌子が音楽を語るだけでなく国家や人民を治めることも含むのだと反論すると、王は顔色を変えてその理由を質す。それに続く部分は次のようである。

騶忌子は言った、「そもそも大弦がゆつくりで温和なのは、君主の象徴です。小弦が高く澄み、リズムミカルで清らかなのは、宰相の象徴です。弦を深く押さえるびやかに弾くのは、政令の象徴です。すべて調和してよく響き、大小がうまくつり合い、曲折してもじやましあわないのは、四季の象徴です。循環往復して乱れないのは、国が治まり栄える象徴です。左右に連なり上下に通じているのは、滅びかけた国を生き残らせる象徴です。よつて琴の音色が調和すると天下が治まります。そもそも国を治め人民を安んじるのに、音楽に

まさるものはないのです。王は「よし」と言つた。<sup>(1)</sup>

ここでは威王と騶忌子は緊張した主従関係にある。その中で騶忌子が巧みに音楽の理論を用い、これを政治に結びつけて、威王を喜ばせ、説得していくさまがよく現れている。これはまさしく「説」の定義にかなうものであつて、その後、騶忌子が宰相の印を受けると、淳于髡をして「なんと説の巧みなことか(善説哉)と感嘆せしめた。

加えて他の故事では示されなかつた「説」そのものの言葉が具体的に記される点が注目される。それは琴の音色のさまざまについて次々と敷衍し、列挙する手法であつて、押韻こそしないが「賦」のジャンルに連なる展開といえよう。<sup>(2)</sup> なお同様の話を『太平御覧』巻四六〇では『戦国策』同巻五七七では『周書』を典故として引いている。

#### 四、諸書に見える伊尹の言説

さて、伊尹の「説」に戻れば、「殷本紀」には「調理の味加減を湯王に説き、王道を実行させた」とあるだけで、彼が説いた中身、つまり「説」そのものの具体的な引用はない。この伊尹の「説」はそもそも存在していたのだろうか。

『漢書』芸文志には、諸子・道家に『伊尹』五十一篇、

諸子・小説家に「伊尹説」二十七篇」を著録するが、これらは『隋書』経籍志では姿を消し、伝わらなかつたものと見られる。このうち『伊尹説』は「小説家」に分類され、「その言は浅薄で、後人が仮託したもののようなだ」（其言淺薄、似依託也）という班固の評語が付けられていることから、当時、民間に流伝していた故事伝説のたぐいを記録したもので、それらを使つて時の政治を風刺したと思われる。

これとは別に『書経』の「商書」中に「伊訓」「太甲（上・中・下）」「咸有一德」を収め、伊尹が王に対して述べた戒めの言葉を記録する。これらは『孟子』や『礼記』といった比較的古い文献に断片的な引用が見えるとはいえず、いづれもいわゆる「偽古文尚書」二十五篇に含まれ、後世の偽作とされる。かつそれらは調理論から政治論へ移る内容ではなく、つまり本稿でいう伊尹の「説」ではない。なお「伊訓」とともに伊尹が作つたとされる「肆命」「徂后」の二篇は、篇名のみが残り、現在は失われている。

そのほかにも伊尹の言説と思しきものが諸書に散在して見え、それらは清の馬国翰が『玉函山房輯佚書』子編・道家類の中に『伊尹書』と題して集めている。馬国翰はこれを内容別に「四方令」「本味」「先亡」「九主」「区田」「雜篇」の六つに分かつが、伊尹の「説」に相当するのは「本

味」のみである。これを次に取りあげよう。

## 五、「本味」に具現化された伊尹の「説」

「本味」は『呂氏春秋』本味篇の一部である。全体は、最初に殷の湯王が伊尹を引見し、伊尹が至高の味を説き始めるまでの事情が簡単に述べられ、その後長大な伊尹の言葉を記すという構成をとっている。

伊尹の言葉は大きく四つの内容からなる。まず生臭い獣が美味になるのは水や火、調味料を用いて臭みを消しているからだという議論、次に味の調節ははなはだ微妙で口で伝えきれないものだという議論、さらに肉、魚、野菜、調味料、水、果実など各種の味の具体例、最後にそれらの美味は天子となつてこそ備えられるから、まず自己の道を完成させることが重要だとする結論、の四つである。

以上が「本味」に見られる伊尹の「説」であるが、ここにいづつかの特色が見られる。

第一は叙事を含み、問答形式で書かれている点である。

その冒頭部分は、

湯王は伊尹を得ると、彼を靈廟で清め、たいまつで照らし、いけにえで血を塗る儀式を行った。翌日、群臣を朝廷に集めて伊尹を引見した。伊尹は湯王のために

至高の味を説いた。湯王は「それらの美味はすぐに備えられるだろうか」と言った。伊尹は答えた、……<sup>(15)</sup>

のように、至高の味に関する議論だけを記述するのではなく、湯王が伊尹を臣下にしてから、彼を引見し、伊尹が王に説きだすまでの過程を描き、それ以後の伊尹の議論へと移っている。つまり最初に湯王から伊尹への問いがなされ、それを受けて伊尹が答えるという問答形式をとっている。

以下、主題は伊尹の答えの中に述べられるが、その内容は道家的な色彩が濃い。これが第二の特色である。たとえば、微妙な技術は口で伝えられないとする議論、

鼎の中の味の変化は、細かく微かで、口で伝えることはできず、心で悟ることもできません。それは弓や馬車を扱う技術の微妙さ、陰陽の変化、四季の特性のよくなものであります。<sup>(16)</sup>

や、結論部分に述べる、まずおのれの道を完成させるのが肝要という議論、

道は他者にはなく、おのれ自身にあるもので、おのれ自身の道が完成して天子となり、天子となれば至高の味が備わります。<sup>(17)</sup>

は、万物の根本原理を志向する道家思想と共通する。

第三は「賦」の要素。伊尹の答えの部分は多くが四字句

で構成される。特にさまざまな美味を列挙した箇所には、種々の事物について長々と述べ立てる「賦」ジャンルとの共通性が窺え、この特徴は上述の騶忌子の語にも見られた。たとえば果実について述べた部分は次のようである。

果実のうまいものは、沙棠<sup>キサキ</sup>の実。常山の北、投淵のほとりには、各種の果実があり、さまざまな仙人が食べました。箕山の東と、青島には、甘櫨があります。

江浦の橘、雲夢の柚子。漢水のほとりの石耳。これを取り寄せるのには、青竜の馬や、遺風の馬を用います。<sup>(18)</sup>

第四は寓意性。ここでは至高の味に備わる原理は非常に微妙なもので、その原理すなわち「道」を知ることはおのれ自身の「道」を知ることであって、その時に天子となれると言う。つまり、至高の味の原理は天子が確立すべき「道」の寓意として語られているのである。

『呂氏春秋』本味篇はもともとの伊尹故事では失われていた「説」そのものを具現化した一つの形であった。その一部はたとえば『史記』司馬相如列伝の注に『伊尹書』として現れる。<sup>(19)</sup>これは「本味」と同内容の記述が伊尹の「説」と受け止められていたことを表している。

## 六、『莊子』の庖丁故事

陳奇猷の説に従えば、『呂氏春秋』の中でも十二紀は秦始皇帝位の六年（前二四一）、八覽・六論は呂不韋が蜀に移つたのち、すなわち秦始皇帝位の十年（前二三七）以後に成つた。<sup>(2)</sup> 八覽に含まれる「本味篇」は後者となるが、これと前後しておおよそ戦国中期から漢代初期にかけて成立したといわれる『莊子』に、別の面から調理をテーマにした話がある。すなわち養生主篇における庖丁の故事である。

庖丁は、文惠君すなわち梁（魏）の恵王に仕える丁という名の料理人であり、料理人が君主に道理を説くという設定において、伊尹の「説」と同じ構造を持つ。さきの「本味篇」との共通点に注目すれば、議論のみならず叙事を含み、まず庖丁が牛を解体する場面の描写から始まっている。

庖丁が梁の恵王のために牛を解体した。手で触れ、肩で支え、足で踏み、膝でつばつた所は、ばざりと音が響き、ざっくりと音をたてて、どこも音律にかない、「桑林」（湯王の時代の舞曲）や「經首」（堯の時代の楽曲「咸池」の一樂章）のリズムに一致していた。<sup>(2)</sup> 次に全体は問答形式で構成される。庖丁のみごとな技を

見た文惠君は感嘆して話しかけ、それに丁が答える。その長い答えの言葉の中では自身の牛刀さばぎに関連した道理が語られ、ここに一篇の主題が存する。そしてそれを受けた文惠君の反応を示して結んでいる。

庖丁の語の内容は大きく三つに分かれる。まず自身の腕前が単なる技術からそれを超えた段階に達していることを述べ、ついで自分の牛刀さばぎに関する具体的な話に移つてなげ牛刀の刃が傷まないのかの秘訣を語り、さらに、最も困難な部位を切り裂く時のようすを言葉で再現する。

ここには道家思想がむろん見られるが、「賦」の要素はない。またその内容をもつばら牛を解体する話に終始する。この点では「本味」との差異があるが、しかし最後の文惠君の言葉「なるほど。私は丁の話を聞いて、自分の生を全うする方法を得たよ」（善哉。吾聞庖丁之言、得養生焉）には寓意性が示唆され、単に牛刀さばぎを記したのではなく、君主に養生の道を悟らせる話となっているのである。

このように、君主に対して調理をめぐる主題を説くだけにとどまらず、「本味」と共通する点が多い。ではさらに調理に拘らず、ある一芸を説く形式に広げると、そのような話は『莊子』には数多くある。次にその中でもよく知られる「天道篇」の輪扁故事をとり上げてみよう。



## 七、『莊子』的な「説」の世界

輪扁とは車輪作りの名人である車職人で、扁はその名である。その話の大きな構造、すなわち君主と職人の問答で構成され、主題が職人の口から自身の専門である事がら——ここでは車輪作り——を通して語られる、という点は庖丁故事と同じである。

桓公は大広間で読書し、輪扁はその下で車輪を削っていたが、その椎と鑿を置いて大広間上がり、何を讀んでいるかと桓公に問う。桓公が聖人の言葉だと答えると、すでに死んだ聖人の言葉だとすれば、それは古人の残りかす（古人之糟魄）にすぎないという。それを受けた桓公はいきり立って次のように言う。

桓公は言った、「私の読書について、車職人ごときがどうして口を挟めるのか。『説』があるならいいが、『説』がなければ殺すぞ」。

そこで輪扁は、車輪を削る技がいかにか微妙で口で伝えられないものであるかを述べ、よって書物にある聖人の言葉も古人の残りかすだと結論づける。

輪扁は言った、「私は私の専門の事で見てみますと、車輪を削るのは、遅くやるとゆるすぎてしつかりはま

らず、速くするときつすぎてうまく入りません。遅すぎず、速すぎず、この感覚を手でとらえ、心に感じ、この道理は口では言えず、この事そのものの中に技が存在するので。……そうであればあなたの読むものは古人の残りかすではありませんか」。

最後の輪扁の議論は牛の解体を語る庖丁の議論と話題こそ異なるが同趣旨である。この議論は「説」があるかと桓公に問われたことへの回答であるから、「本味」の議論が伊尹の「説」の具体的な形であるように、これもまた輪扁が述べた「説」に相当する。ちなみに輪扁故事は『淮南子』道応訓にも見えるが、ここでは「説」があるかという桓公の問いに対して、「そうだ。『説』はある」（然、有説）の語で輪扁の言葉は始まっている。従って、庖丁が文恵君に語った話も同様に「説」と見なすことができる。

ところでこうした「説」が最も数多く現れるのは『戦国策』である。今、一つだけ例をあげよう。その「秦策一」には張儀と司馬錯が外交軍事政策をめぐる論争する場面が見られる。秦の恵王が蜀を討とうとしたところへ韓が攻め込んできた。蜀と韓のいずれを先に討つかで王が迷ったため、二人がそれぞれの主張を述べる。

司馬錯と張儀が秦の恵王の前で論争した。司馬錯は蜀

を討つことを主張した。張儀は「韓を討つた方がよい」と言った。すると王は「その説を聞かせよ」と言った。<sup>(21)</sup>

そこで張儀、司馬錯の順にそれぞれの主張が述べられる。そのあとで王は「よし、私はあなたに従おう」（善、寡人聴す）と言ひ、司馬錯の主張を採用する。

『戦国策』に現れるこのような「説」の形式は君主と臣下という緊張した主従関係の中で、臣下が王を説得するという形が基本である。その結果、王はこの場合のように直接「よし」と言うか、そうでなければ満悦する様子が描写されるかして、臣下の「説」に納得する。

騶忌子の琴の議論でもそうであり、『莊子』の庖丁故事も文恵君に「なるほど」（善哉）と言わせていた。ところが輪扁の「説」ではそれが崩れている。君主である桓公に対して輪扁の地位は明らかに低いが、その関係は対等である。また桓公が輪扁に説得されたかどうかも明らかではない。

このような『莊子』的世界の「説」がさらに徹底されたものには、「至楽篇」に見える莊子と髑髏の問答、いわゆる「髑髏問答」がある。ここには君主や王侯、臣下といった身分的上下関係は存在しない。いわば世俗の人間の代表

である莊子がひからびた髑髏の死を憐れむのに対し、髑髏は「死の説」を説き、生が死よりよいとする世俗的な考えに反論する。だが莊子は最後まで髑髏の「説」に納得せず、この二者の問答は平行線のまま終わっている。

#### 八、後世における影響と展開

以上のような古代の「説」は、最初に触れたようにそれが独立した一篇ではないが、後世の文学作品に大きな影響を与えた。ただこのことは今後の課題とし、ここではいくつかの作品からごく粗い見通しを述べるにとどめたい。唐代に至るまでに「説」ジャンルは一旦途絶えかけるのだが、曹植を媒介として韓愈や柳宗元が新たに道を開いた。『莊子』至楽篇の髑髏問答が、張衡の「髑髏賦」の構造や修辭を吸収しつつ、曹植の「髑髏説」に繋がり、やがては柳宗元の「捕蛇者説」へと発展する過程は旧稿で述べたので、ここでは詳説しないが、同じく柳宗元「説車贈楊誨之」（車を説いて楊誨之に贈る）は車の喩えを用いて官界における身の処し方への忠告を述べたもので、これは輪扁の話の一つの発展型と見ることが出来る。

任地に出発しようとする義弟の楊誨之に向って、柳宗元はちやうど近くを通りかかった車を指差し、一台の車がな

ぜ重量に耐えて世に用いられるかを説明する。そして彼は「今のは一車の説で、衆車（多くの車）の説ではないから、私はあなたに衆車の説を告げよう」（は一車之説也、非衆車之説也、吾將告子乎衆車之説）と言つて、さらに言葉が続ける。その中に、

このように車の種類は多い。しかしながらその大切な点は、よい材質と精巧な部品、外側は円形で内側は方形ということがある。

とあるのは、表面上は車の議論であるが、実は官界で生きていく要諦として、学問によつておのれを充実させると同時に外との関係に十分慎重であるべきことへの注意を促したものであり、ここにも寓意が見られるのである。

ただ「捕蛇者説」と「説車贈楊誨之」の大きな違いは、前者が蛇捕りその人に語らせているのに対して、後者は作者柳宗元自身の言葉だという点にある。つまり「捕蛇者説」は調理人になりすまして味の理論を語つたような形式の伊尹の「説」を、より直接受け継いだものといえよう。

そして伊尹の「説」の影響は、むしろ「伝」の作品に色濃く現れる。柳宗元から一例をあげれば「種樹郭橐駝伝」の中で、植木職人の郭橐駝がひとしきり植木の経験と理論を語つたのち、次のような問答がなされる。

問う者が言つた、「あなたの道理を役人が人民を治めることに応用できるだろうか」。郭橐駝は言つた、「私は植木のことしか知りません。政治は、私の仕事ではありません。しかし村にいますと、お偉方が来てあれこれと政令を出し、一見、人民を憐れんでいるようでありながら、結局は災いをもたらしているのを目にします。……」。問う者は言つた、「ああ、みごとだ。私は木を養う話を聞いて、人民を養う方法を得たよ」。

この末尾は上述の『莊子』庖丁故事の結びに酷似するが、形式上の類似だけでなく、職人に道理を語らせる構造や主題が伊尹の「説」の影響下にある点でも共通する。

庖丁故事や輪扁故事を發展させたものには、宋・歐陽修の隨筆集『帰田録』巻一に収める売油翁の話が知られる。これは射術の力量を誇る陳堯咨に対して、通りかかった油売り（売油翁）が「熟練すればそうなるだけだ」（但手熟爾）と言ひ、ふくべの狭い口に油を注ぎ入れる技を披露して、陳堯咨を納得させるといふもの。但しここには翁自身の講説はなく、「熟練すればそうなるだけだ」（惟手熟爾）と繰り返すだけである。この作品はむしろ「説」として書かれていないのだが、主題は同じでも言葉によつて説得するのを原則とする「説」とは異なる手法が用いられている。

明初に至って劉基が著した短編の寓言「柑売者言」(『誠意伯文集』卷八)は、外見が美しく中身のすっきりだめになった柑(みかん)を買った作者がみかん売りに苦情を言う、逆にみかん売りから今の為政者こそそうではないかと論される作品である。逆にこれなどは「柑売者説」と題してもよい文でありながら、劉基は「言語対問」というジャンルを独自に作り、表題を「柑売者言」としている。

## 九、結び

伊尹の「説」は、調理人に扮して湯王に近づいた伊尹が味の道理を説いて王を喜ばせ、やがては本来の目的である政道を論じるものである。ここでいう調理人は王侯などと比較して社会的地位は低い、同時に職人的な専門知識を有する人間である。「説」は下位の者が上位の者をいかに喜ばせ、説得するかを基本とする。その際に職人的な技術や理論は大きな力となり、「説」を成立させる要素となり得た。

伊尹の「説」を再構成したものには「本味」(『呂氏春秋』本味篇)があるが、むしろその基本構造は『莊子』に受け継がれ、展開してゆく。そこでは上位者と下位者が登場しても、その関係は対等であり、相手を喜ばせようとする姿

勢は見られない。また、その主題は政治的なものではない。よって『戦国策』などに見られる、君主を絶対的上位者とする君臣間の「説」とは大きく異なる。

この『莊子』的に展開した伊尹の「説」は、その後、曹植がこれを独立した作品として書き残し、それを媒介として、唐代になって散文ジャンルとして再生された「説」の一部分を構成した。なお唐代以後、伊尹の「説」の構造をもった作品は「説」に限られず、「伝」など他のジャンルの文にも現れている。

こうした後世に大きく展開する作品群の原型が伊尹の「説」であった。劉勰が『文心雕竜』論説篇で「説」の初めに伊尹故事をとり上げたのは、その後の中国散文史から振り返っても慧眼であると思われる。

## 注

(1) 引用は福井佳夫訳『中国の文章―ジャンルによる文学史』(汲古書院、二〇〇四年)三五頁による。

(2) 説者、悦也。兌為口舌、故言實悅懌。……説之善者、伊尹以論味隆殷、太公以弁鈞興周。

(3) 伊尹為宰、百里奚為虜、皆所以干其上也。

(4) 上古有湯至聖也、伊尹至智也。夫至智説至聖、然且七十説而不受、身執鼎俎為庖宰、昵近習親、而湯乃僅知其賢而

用之。故曰、以至智說至聖未必至而見受、伊尹說湯是也。

- (5) 万章問曰、人有言、伊尹以割烹要湯、有諸。孟子曰、否、不然。伊尹耕於有莘之野、而桀堯舜之道焉。……湯使人以幣聘之、鬻鬻然曰、我何以湯之聘幣為哉。我豈若妣咎之、中、由是以桀堯舜之道哉。湯三使往聘之、既而幡然改曰、与我妣咎之中、由是以桀堯舜之道、吾豈若使是君為堯舜之君哉。……

- (6) 伊尹名阿衡。阿衡欲奸湯而無由、乃為有莘氏媵臣、負鼎俎、以滋味說湯、致于王道。或曰、伊尹妣土、湯使人聘迎之、五反然後肯往從湯、言素王及九主之事。湯莘任以國政。
- (7) 臣下が君主を説得することの困難さについては『韓非子』説難篇に論じられている。

- (8) 呂尚蓋嘗窮困、年老矣、以漁釣奸周西伯。……周西伯猶果遇太公於渭之陽、与語大説。……載与俱歸、立為師。

- (9) 夫五殺大夫、荊之鄙人也。聞秦繆公之賢而顧望見、行而無資、自粥於秦客、被褐食牛。期年、繆公知之、莘之牛口之下、而加之百姓之上、秦國莫敢望焉。

- (10) 及伯陽即位、好田弋之事。六年、曹野人公孫彊亦好田弋、獲白鴈而獻之、且言田弋之説、因訪政事。伯陽大説之、有寵、使為司城以聽政。

- (11) 騶忌子曰、夫大弦濁以春温者、君也。小弦廉折以清者、相也。攬之深而舍之愉者、政令也。鈞諧以鳴、大小相益、回邪而不相害者、四時也。夫復而不乱者、所以治昌也。連而径者、所以存亡也。故曰琴音調而天下治、夫治國家而弭

人民者、無若乎五音者。王曰、善。

- (12) 「説」と賦(騷賦)との関連性については福井佳夫「上秦文」の文体について——鄒陽の「獄中上書自明」を中心に——(『日本中国学会報』第三十五集)、小南一郎「語から「説」へ——中国における「小説」の起源をめぐって——」(『中国文学報』第五十冊)に言及されている。

- (13) 劉燦『先秦寓言』(上海古籍出版社、一九八八年)三二頁
- (14) 『孟子』万章上篇に引く「伊訓」、「礼記」緇衣篇に引く「咸有一德」、「孟子」公孫丑上篇・「礼記」表記篇・同緇衣篇・同大学篇に引く「太甲」など。

- (15) 湯得伊尹、祓之於廟、燂以燿火、鬻以犧豕。明日、設朝而見之、説湯以至味。湯曰、可対而為乎。対曰、……

- (16) 鼎中之変、精妙微纖、口弗能言、志弗能喻。若射御之微陰陽之化、四時之數。

- (17) 道者亡彼在己、已成而天子成、天子成則至味具。兪樾の説に従い、「止」を「亡」に改める。

- (18) 果之美者、沙棠之実。常山之北、投淵之上、有百果焉、群帝所食。箕山之東、青島之所、有甘櫨焉。江浦之橘、雲夢之柚。漢上石耳。所以致之(馬之美)者、青竜之匹、遺風之乘。陳奇猷『呂氏春秋新校釈』(上海古籍出版社、二〇〇二年)の説に従い、「青島」を「青島」に改め、「馬之美」は衍字とする。

- (19) 『史記索隱』の応劭注に「伊尹書、果之美者、箕山之東、青島之所、有虚橘、夏孰」とあり、注(18)の文と重なる。

(20) 注(18) 前掲書一八八五—一八八九頁参照。

(21) 庖丁為文惠君解牛、手之所觸、肩之所倚、足之所履、膝之所踣、砉然騞然、奏刀騞然、莫不中音。合於桑林之舞、乃中經首之會。

(22) 桓公曰、寡人說書、輪人安得識乎。有說則可、无說則死。

(23) 臣也以臣之事觀之。斲輪、徐則甘而不固、疾則苦而不入。不徐不疾、得之於手而應於心、口不能言、有數存焉於其間。……然則君之所說者、古人之糟魄已夫。

(24) 司馬錯与張儀爭論於秦惠王前。司馬錯欲伐蜀、張儀曰、不如伐韓。王曰、請聞其說。

(25) 拙論「曹植の『説』について」(『中国文化』第六八号)、「捕蛇者説」はなぜ「説」か(『京都教育大学国文学会誌』第三十六号)参照。

(26) 其類衆也。然而其要、存乎材良而器攻、円其外而方其中也。

(27) 問者曰、以子之道、移之官理可乎。駝曰、我知種樹而已。理、非吾業也。然吾居郷、見長人者好煩其令、若甚憐焉、而卒以禍。……問曰、噫、不亦善夫。吾問養樹、得養人術。

(京都教育大学)